

広中一成著

傀儡政権

——日中戦争、対日協力政権史

〈角川新書、二〇一九年二月、二七二頁〉

現在の中国共産党は、自らの統治の正統性を「救国ナショナリズム」担い手競争の勝者であるとの理由に求めている。「国歌」としての「義勇軍行進曲」が田漢・聶耳のコンビによるものであり、抗日歌曲であった（ある？）ことは言うまでもあるまい。

日中戦争の時期、果たしてそうした「救国ナショナリズム」は有効であったのだろうか。当時の状況を考えると簡単に有効であったとは言えないのではないだろうか。ナショナリズムも一つのイデオロギーであり、自然な感情などではない。一九四二年後半から翌四三年上半期を回顧した劉震雲のルポルタージュ小説『温故一九四二』は一九九三年に発表され、二〇一二年には張国立主演で映画化された。

そこには、飢饉の中で飢えに苦しむ民、見殺しにする国民党軍、軍糧を供出する日本軍（映画ではぼかされている）が登場する。また中共中央の所在地であった延安では「大生産運動」が展開され、「自力更生」が賞揚されたが、それは民からの収奪が不可能ほど貧しいところに根拠地を持たねば敵の手が及び危険であったからである。同じ頃、延安から汪政権に周仏海を通して連絡が何度も入っている（『周仏海日記』）。ということは、南京の汪政権の方が経済的にも社会的にも安定していたのではないだろうか、少くとも豊かであったのではないだろうか、という問い掛けは有効であろう。

本書は、日本と協力した「漢奸」の物語である。特に人口に膾炙することの少ない長城以南の冀東政権・中華民国臨時政府・中華民国維新政府、そしてそれらを統合してゆく汪政権、それらに関わった人物たちについて手際よく整理している。そこには、民国以前からの地方有力者、辛亥革命で孫文と

共に戦った人物、蒋介石の対抗馬と目された人物と、旧来の中国であれば「紳士」「士大夫」「郷紳」と呼ばれるような人々や、中央で活躍した知識人とが入り交じっていることがわかる。日本との協力の理由もさまざまであり、当地の現政権の不満分子であったり、残留しているうちに協力せざるを得なくなったりした者もあった。そして汪兆銘は、和平こそが中国にとって生き残る術であると考え、日本側も二年以内の完全撤兵を約束したことがあったのだ。彼らは「漢奸」と呼ばれるようにはなるが、大なり小なり主体性を維持しようとし、統治下の民の生活に配慮を行っている。

対日協力の問題は、ヨーロッパにおける対独協力と同じく戦後史との連関の中で考えなければならぬ問題である。国民国家である以上ナショナリズムイデオロギーから自由ではない。まずは「色眼鏡」を掛けずに実像を見始めるきっかけが必要なのではないだろうか。

（三好章）